

滋賀県文化審議会評価部会第8回会議 議事録概要

- 1 日 時 平成 27 年 3 月 17 日 (火) 10:00～11:40
- 2 場 所 滋賀県庁本館 3 C 会議室
- 3 出席者 委員：中川委員、東委員、直田委員、殿村委員
(4名出席)
事務局：総合政策部次長、総合政策部管理監ほか
- 4 議 題 (1) 平成 26 年度の滋賀県文化振興基本方針評価指標の実績について
(2) 平成 26 年度の個別事業の評価について
(3) 次期基本方針における評価指標の設定にかかる部会での検討事項について
(4) 現基本方針の実施状況と評価指標の分析・総括について
(5) その他
- 5 議事録概要 以下のとおり

■ 次長挨拶

■ 議題

(1) 平成 26 年度の滋賀県文化振興基本方針評価指標の実績について

委員 指標 1 4、県の施策に満足しているかという質問はどのような聞き方をしているのか。答え方が難しいのではないかと思います。

事務局 設問に対して様々な施策分野の選択肢が設けられている。

委員 目標値を達しているので問題はないが、前回と比較して設問に対して答えにくいのではないかと感じる。設問の仕方を変えてはどうかと思った。一意見として捉えてほしい。

委員 滋賀の文化を誇りと感じる人が増えているのに対して、芸術文化祭の写真展や美術展に行った人が少ないというのは、インターネットで自由に文化に触れることができるという習慣が定着してきていることが原因なのではないか。スマートフォンなどにも今までの概念が変わってしまうような機能が備わっていて、それが普通になり麻痺させられている。芸術を鑑賞するために足を運ぶという習慣をなくしていると個人的に感じる。別の施策を考えることが必要。行きなさいではなく、楽しく巡れるようにすることや、観光の一部にするだとか全施設を回って学習しようとか違った考え方を持っていかないと、今までのようなアプローチだと足を運ぶ人は減る一方になるだろうと個人的に思う。

着目したのは、指標 1 8 の滋賀を誇りに思う人の割合がアップしているのに対し

て、芸術文化祭における若者の参加者数が減っているという事実。実際に見に行くという行動がなくされているという現実があるのではないか。

部会長 ここていう、参加者数は出展した人の数ということでよいか。創造する側、クリエイトする側。

事務局 鑑賞者数は別に集計している。補足だが、芸術文化祭については実行委員会があり、事業終了後には反省会を設ける。その際、若い出席者から、「若者は今までのアプローチだと見に来ない。自分も参加できる参加型芸術祭が主流であり、そういう方向に向かわないといけない。」との意見があり、委員会としても自己改革の必要性を認識したところだ。

委員 視覚と聴覚だけではダメで、プラス触覚が大事。肌感覚、体験することを取り入れないと今の時代の人には動かないのではと思う。

委員 芸術鑑賞した小中学生と文化・芸術の体験学習を行う児童生徒数が減っていることは理由があるのか。また、年度途中であるからだろうか。

事務局 一月末時点の集計なので、今後まだ増える可能性がある。

委員 数字に一喜一憂することは大局を見誤る。データが少なく統計的な偏差があるので、細かい数字が多少増減することに惑わされるというのもどうかな、という気はしている。ものによっては5年に一度くらいの集計で、大局的な流れがみえれば良いのかな、という感想を持った。

先ほど話題に出た、若者の芸術文化祭への参加人数が少ないという問題で、文学祭・写真展はもともと少ないが、美術展への参加が減ってきていることが原因のようだ。最近ではインスタレーションなどが流行りというか、おもしろい。若者はそういう方面に向かい、美術展のようなものを志向しない、ということが何となく見えてきたように思う。ただ、指標1の創作活動割合や指標3の鑑賞割合などは少しずつ増えており、全般的にはそれなりの成果が出ていると思う。

それから、文化活動に参加するというのは、先ほどご指摘のとおり国民全体の嗜好が変わってきているように思う。それにどういった対応をすればいいかまではまだ見えないが、ひとつはコミュニティーというか美術館を巡るコミュニティーであるとか、美術、舞踊、舞台など、それぞれのコミュニティーが存在しているのだけれどそれを捉えきれていない。アートを核としたコミュニティーを仕掛けるという動きを作るのもひとつの方法かもしれない。

もうひとつは、後の美術館の評価にもあるが、ユーザーさんはヘビーユーザーが結構多いということがある。それが先ほどのコミュニティーとの関係もあるし、ただ単に美術展や舞台を観に見に行くだけでなく、行ったことが自分の暮らしに花を添えるというか、なかなか言葉では表せないが、一種のライフのストーリー性というか、生活自身を洗練したものに練りあげていくというシカケがあってもいいのではないかな、

と思う。そういうものを拾い上げられるような指標を今後考えていかななくてはならないのかなと思った。

部会長 指標1 3国登録有形文化財の数について。発掘すべきものというよりは、むしろ文化財の活用件数というものに指標を変えたほうがいいのではないか。文化財を使った観光誘致施策の開発とか、文化財を使ったシンポジウム、地域コミュニティー振興策とかそういうものを取り入れたほうがよい。保護ではなく、活用を指標とするべき。

(2) 平成26年度の個別事業の評価について

部会長 美術館へも提示済みで、修正なしということで。ただこれだけは伝えてほしいというところは、全般的に美術館の内部的な機能性や、学芸員の水準の高さは我々感心しているということは伝えてほしい。にも関わらず、アクセスの悪さ、瀬田駅前からのアプローチに関する配慮の無さ、行政からの応援のやる気の無さに怒りを感じる。これは美術館の責任ではない。新生美術館の基本計画にアクセス利便性の改善とあるが、新美術館の取り組みに講じて開始することではない。今もう既にやらなくてはいけないものと言いたい。毎回美術館に行く度に徒労感と怒りを覚える。行政からサポートする気がないのだろうと思う。美術館を野ざらしにして、さあ自分で頑張れという態度が見える。行政全般である文化ゾーンをどうバックアップするのかという戦略思想をしっかりと持ってほしいと思う。

また美術館にとっては少し厳しい表現もあるかなと感じる。他の委員からはそういう意見もあったと学芸員の方に伝えてほしい。

委員 展覧会のタイトルがもっと分かりやすければいいかと思う。今は周りに文化があり過ぎて、自分が知っている名前でしか反応しなくなっている。アクセスの件ももちろんだが、このタイトルの付け方が一部の人しか分からないマニアックな付け方だと思った。知っている人は観たいだろうが、知らない人は勉強する気がないというのが現代人の特徴なので、パッと見て響くものでないと興味がわからない。遊亀（ゆき）と靱彦（ゆきひこ）と言われても分からないし、師からのたまものでも分からないし、受け継がれた美と言われても分からない。額田王と聞けば行きたいと思うかも知れない。タイトルの付け方は工夫されると良いと思う。

委員 各県の図書館によく行くのだが、福井県では無料のバスが出ていて、あれがどのように維持されているのかがずっと疑問だ。滋賀県には図書館と美術館という良い財産があるので、やり方を上手く取り入れることが出来ないものだろうか。財政が苦しいのはどの県でも同じはずなのに、どうして福井だけがうまく回っているのだろうか。

(3) 次期基本方針における評価指標の設定にかかる部会での検討事項について

部会長 検討作業の流れについてはこれでよいだろうか。

(4) 現基本方針の実施状況と評価指標の分析・総括について

部会長 これが総括になる基本なので加えておく意見があれば。

委員 総括としてはこれでよいのではないか。質問だが、芸術文化祭における30代未満の若者の参加者数の議論をずっとしているが、年齢層は把握しているのか。大学生のことをいってるのか、社会人だけをいってるのか、など。高校生までだと先生の推薦で色々な所へ出展するだろう。内訳が分かれば次につながるのではないか。

事務局 どういう形で集計しているか、確認しておく。

委員 指標の書き方だが、指標3の一年間に芸術文化を鑑賞したことのある県民の割合、というのは、先ほどから申ししているとおり、鑑賞の仕方が様変わりしているのでもしかしたら100%になる可能性もある。すごく身近になってきているので、これは「滋賀県内の」芸術文化なのかを明確にしたほうが良いと思う。

もうひとつは情報発信についてだが、新聞を見ている人は本当に少なくなってきているので、文化施設はホームページをお持ちなので、アクセス件数を入れたほうが良いのではないかと思う。将来的には滋賀文化のプラットフォーム的なサイトがあればいいのかと。今はチラ見せがトレンドなので、展覧会があっても動画で見せるようしないと来ない。その辺りの工夫も必要ではないか。また新聞はこれから指標になりにくいと感じる。

委員 諮問書の2020年を見据えた、という記述は東京オリンピックを意識してのことかと思うが、オリンピックの文化プログラムはもうスタートしており、滋賀県の動向が気になる。ロンドンオリンピックでは障害者のアートを対象とした「アンリミテッド」というキーワードが中心的な位置を占めていたと聞いている。まさにアールブリュットなどが表に飛び出す機会になるのではないかと思う。

滋賀県の県政指標はあるのか。県政全体にまたがる資料など。

次長 ある。滋賀県基本構想の中に、県政全般の各分野にかかる指標が設定されている。指標設定の考え方については色々あり、元々は定量的な評価が必要ということでNPMの流れを汲んで入ってきたというのがある。ただ、政策・施策全般を定量的なものだけで評価できるのかという葛藤というか、課題もある。

委員 その指標も達成度や進捗度について評価しているのか。それらの指標の中にどれぐらい文化的要素が入っているのか関心がある。こちらの指標とある程度連動していないと意味がないので、今後検討いただきたい。

先ほどどこかの指標の説明で、文化だけでなく環境に関する活動人数が入っているという話があったが、それはそれでいいんじゃないかと思う。ただ文化だけの指標でそこだけわかればいいという話ではない。そこは少し柔軟に、大きな網を掛けることも考えないといけないのではないか。

重点施策1や2などで、民間の事業とか、自治体はからんでいるが県はからんでない事業とか、人・民・官での活動も結構ある。そのあたりも捉えられるような手立てがないものだろうか。それらが捉えられないと、全体としての県の文化、県民の文化レベルがどうなっているかの把握できないだろうと思う。

それから、それぞれの成果をまとめられてよくわかるのだが、成果を何らか指標に反映していかないとまったく気がする。指標の選び方なりデータの取り方なりに、これまでの成果をしっかりと踏まえないといけないと思う。

指標の5、6、7、8あたりだが、指標5などでアウトカムの視点という重要な指摘をされているがまさにそのとおりだと思う。例えば指標7でも、もう要らないのかなという話もあるが、アウトカムとしてみればもう少し違う視点があるのかもしれない。その辺も考えて、やっぱり他の指標でカバーできるということであれば外す、置き換えるということがよいのかもしれない。

指標7であれば滋賀県は環境の県だし、琵琶湖とか山があって非常に美しい県なのでそういう自然景観、あるいは古い町並み景観も文化の素材だから、そういうものを学んでいく子どもが増えるということはすごく良いこと。逆に街並みについて学ぶ機会はないのだろうか。これまであまり話題に上っていなかったのだ。

重点施策4の若手芸術家の育成・支援だが、大学との連携もあるが、外国人を引っ張り込むというイメージも持たれておいた方が良いのではないかと。文化芸術はボーダーレスなので。特に最近では韓国、中国などは若手の才能ある芸術家がたくさん出ているが、そういう人にしばらく活動してもらおうなど。外国人の視点は必要かと思う。

あと重点施策6で、伝統芸能とか、神社で行われている行事などがあまり取り上げられてないなと思った。国の登録建造物なんかよりもずっと大事なのではないかと思う。滋賀県の最大のコンテンツは、びわ湖ホールオペラが片方にある、もう一方にそういう伝統的な民俗行事があるんだ、というぐらいの位置付けをしないとけないと思う。ある意味でグローバルに通用するコンテンツといえばまさにそれだと思う。こうした視点で滋賀県の独自性をもっと振興するような指標が必要なのでは。これは重点施策7や8にも繋がることだ。地域に根付いたものも放っておいたら消えてしまうので。数十年先には高齢化が進んで継承が途切れてしまうのは非常にもったいない。滋賀県は探せば地域地域に全国有数の素材があるのではないかと思う。

部会長 まず重点施策1では、民間団体が主催している文化芸術行事をどういう風に把握するのか。難しい面があるが、後援申請があったものしか把握できないのか、他に把握する方法がないのか、単なる疑問だが、気になる。

今回入れたほうが良いと思うものが、企業等による文化活動の支援、企業メセナの件数。例えばびわ湖ホールでは企業の冠事業を実施しているはず。そういうものをもっと増やしていく必要がある。この数字が欲しい。重点施策2では、障害者、高齢者、子育て中の保護者等の文化活動の充実とあるが、これに関わる参加者数みたいなものが出せるのであればこれは大事なデータになると思う。文化的人権に配慮した施策の統計がちゃんとここに出る、としておいた方が。重点施策3では、教員を対象とした文化研修機会の充実とあるが、指標5、6、7、8が全部子どもを対象にした指標だ。

これは本当に実行できているのか疑問だが。指標としてきちっと掲げたほうがい

い。

次に重点施策6、滋賀ならではの文化的資産の発掘・保存・活用だが、保存のほうで地域ごとのコミュニティーの伝統行事、伝統芸能の継承者をどれだけ育ててきたかというのは大事な数字ではないか。滋賀県は各地で地域コミュニティー再生の取り組みが盛んなのでそれをバックアップするような指標に挙げてほしいと思う。

指標14の個性ある地域文化の構築の施策に満足した県民の割合だが、この設問は答えにくいと思うので何とかならないだろうか。設問がぼんやりしている。県民に対する設問調査の質問は次回、見直したほうがいい。

観光客の宿泊者数は、他の要素により数値がぶれるというのは確かにそうだ。であるならば、県立文化施設の総入場者数のうち、県外者に占める数を統計数値として出してはどうだろうか。文化施設が誘引した入込客数。その方が第一次数値として正確では。そうすると、指標15の県立文化ホールの自主事業入場者数というのがちょっとオーバーラップしてくるが、これは別に替えてもいい。文化ホールは文化ホールとしてきちんと評価しているので。この自主事業とは自前の予算で行っている事業だが、この指標15をどう扱うか。非常にオーソドックスな指標なのでこれはこれでいいという言い方もあるが。そうすると指標20は県立文化ホールだけではなく、県立の美術館、図書館、文化産業交流会館等々の県の運営している施設に来ている県外者。重なりはあっても違う指標と言えるのではないだろうか。その方が正確な数字がでるのではないか。

言い方によっては違う言い方をする人もいるので困るのだが、県外の人ばかりサービスして県内の人に還元できないのかと言う言い方をする人もいる。でも県外者を誘引しているということは消費誘発効果が確実にある訳だから。

(5) その他

(事務局から新生美術館の設計者選定プロポーザルの審査結果に関する報道発表資料等について説明)

以 上